

## 6-10世紀の東方キリスト教建築様式

岡田 保良

### 1. はじめに

西アジアの歴史を通観する場合、イスラームの新しい価値観がヨーロッパのルネッサンス思想に相当するとみて、それ以降を西アジアの「近世」とするような歴史観もあるようだが、一般にはイスラーム社会の成立をもって、古代から中世への転換点とみなすのがふつうだ。ただシュメール文明以来つづいたメソポタミアの先進性を依りどころとした諸民族による覇権の終焉は、西アジアの歴史上依然重大な画期となるのであり、その前後で文化の担い手にも大きな変化があった。因みに古代の前期と後期の境は、アレクサンドロスの東征に置く見方もあるが、その後の西アジア世界を主導した勢力の台頭という面から、前6世紀中にペルシア・アケメネス朝がメソポタミアを制したことがより重要な意味をもつように思う。

メソポタミア地方がローマとパルティアとの間にあって両勢力の緩衝地帯だった古代後期のある時期、西アジアの片隅にキリスト教が興った。ヘレニズムに次いで西方からメソポタミアに到来した建築文化の大きなうねりは、そのキリスト教の伝道に伴う。北イラクのエルビルを中心とするアディアバーネと呼ばれた地方では、早くも2世紀はじめ頃、ある程度組織化されたキリスト教社会がすでに成長しつつあった。3世紀の後半にはペルシア王がキリスト教徒を迫害し始めたという記録すらある。431年、この地方に普及していた教義が異端とされるに及び、ビザンティン領内の正統派キリスト教に対して、東シリア教会（ネストリウス派教団）が分離独立する。このことがペルシア世界にキリスト教が許容される気運をもたらすことにもなった。教団の伝導活動はさらに東方へと進展し、635年には公式の使節が太宗皇帝時代の唐長安を訪れる。

本研究の目的は、最近の考古学調査の成果を通じて、そうした時代のキリスト教建築に確かな規範が用意されていたことを明らかにする点にある。

### 2. 沙漠の修道院遺跡アイン・シャーイア

イラク共和国の中部に、イスラーム教シーア派の聖地として知られるカルバラとナジャフという二つの町がある。ともにユーフラテスの右岸にほど近く、南北に80 km 余の距離がある。これら二つの聖都を結ぶ線の西方一帯を「イラク西南沙漠」と呼び、国士舘大学イラク古代文化研究所が1971年以降長期にとりくんできたアッタール洞窟は、その沙漠に立地する遺跡の一つだ。すぐ近傍には建築遺跡などなく、発掘はもっぱら洞窟内で見つかった紀元後1-3世紀ごろの埋葬址が対象とされた。埋葬遺体に伴って出土した染織遺物が多彩な研究成果をもたらす一方、墓として利用した人々の由来については未だ手がかりに乏しい。アイン・シャーイア遺跡の発掘はそういう問題意識から始まった。現地調査は1986年から3年度にわたり、初期イスラーム時代のキリスト教遺跡の発見という予想外の結果をもたらすことになった [Fuji et al. 1989]。

遺跡の崖の麓に沿って、東端にキャバンサライを想起させるような周壁をもつ建物（F地区）があり、中央地点付近（B地区）に小房を列ねた建物を水槽らしい遺構、さらには礼拝堂があったらしい痕跡（C地区）を認める。西の端にはドゥカキンと呼ぶ洞窟群があって、修道士たちが山籠りの場にあてたにちがいない。これらすべてがアッバース朝初期のほぼ同時期に営まれていたことは確実で、私たちはこの1 km 足らずに点在する遺構群全体を一つの修道院跡と判断した。

F地区周壁建物の中央に教会堂がある（図1a）。この遺構の建築上の要点は以下のとおり。

1. 日干し煉瓦積みで、壁面と床に石膏プラスターを張る。
2. 礼拝部は三廊構成で、アーケードを用いず、ふつうの壁で仕切る。
3. 三つの廊に対応して、3室の矩形内陣が並列する。
4. 中央内陣のみを彩色壁画で飾り、半円アプスの代わりに奥壁に矩形ニッチを備える。
5. 建物の長軸は東西方向になく、内陣側で北へ60度も振れる。
6. 両側辺と三廊の隔壁に、三つずつの開口を対称の位置に設ける。
7. 東長辺の開口が中庭に通じ、西側は付属室と結ぶ。

この種の建築遺構は、地中海沿岸部を除くと、西アジアにはわずかししか知られていなかった。だが近年のJ.M. フィエらの研究によると、史料上は決してそのような状況でなかったことを知る [Fiey 1968]。アイン・シャーイア遺跡での教会遺構の発見は、手詰まり状態にあったこの分野の建築研究に新たな視点を与える契機となった。

### 3. イラク領内の教会遺構

イラク領内で考古学的調査が行われた10例足らずの初期教会建築の遺構を比較観察すると、北部地方と南部とでは、建築上の諸要素が多く側面で異なっていることが目につく。北の2例カスル・セリージュ [Oates 1962] とムセイフネの教会 [Abbu 1987] は、その切り石積み、身廊のアーケード、さらにアプスの半円形状など、仮に北シリアのどこかにあった事例だと紹介されても、誰も疑いを差しはさまないだろう。前者は6世紀代、後者は7世紀以前と報じられている。

南部では、クテシフォンの遺丘の一つカスル・ピント・アル・カーディで発掘された遺構 [Reuther 1929] を別にすれば、ヒーラ (マウンドVとXI) [Talbot Rice 1934]、クセル [Finster & Schmidt 1968] など、教会堂に類する建築遺構は西南沙漠地方に集中して知られる。南部の教会については、二つの著しい特徴を指摘できる。一つは内陣の造りであり、いま一つは礼拝空間の間仕切りである。矩形平面を採用した内陣に、

ヴォールトやドームを架けた深くて高まりのある祭壇空間は、浅くて曲面のある半円アプスを採用したシリア系の聖所よりも、当地でははるかに馴染み深い空間形状だった。特徴的な三内陣形式はシリアに由来するとしても、ササーン朝建築に馴染んだ人々の造形意識が働いていたといえる。礼拝空間は三廊式がもっばらで、シリアで最もふつうにあるアーケードで仕切る形式と、外壁と同じ煉瓦積みの壁で仕切る当地特有の形式とがある。後者の場合、三廊形式といってもアーケード形式に比べて広間としての一体性に欠け、身廊の独立性をより強調した点では単廊式に通じるところがある。クテシフォンの教会は、身廊両側に柱を立て並べるものの、内陣3室は身廊に対してのみ開口しており、形式上は単廊式として扱うべき教会堂と思う。ここに、従来シリアを中心に論じられてきた東方キリスト教会の建築様式とは異なった新たな建築類型を見いだす。

### 4. ハーグ島とファイラカ島のキリスト教遺跡

つい最近になって、フランス調査団がクウェイト沖のファイラカ島アル・クスール遺跡で教会遺構を発掘した成果が報じられた [Bernard et al. 1991]。発見された教会建築のプランが公表されており、アイン・シャーイアの遺構と対比してみると、その幾何学的相似には驚きを禁じえない (図1b)。さらに1959年に調査されたアラビア湾 (ペルシア湾) に浮かぶハーグ島の修道院遺跡の教会遺構 [Ghirshman 1960] にも、同様の計画理念を認めることができる (図1c)。

アル・クスール教会堂は方位を西南西—東北東とし、全長35m、幅19m。ほかに発掘途中の南付属室群と、未発掘ながら地表面からわかる北側延長部分がある。西側正面の前面は街路というより小さな広場だったらしい。東側外壁は確実に南に延び、未発掘の付属室群と一体になる。三廊の西端は南北に長いナルテクスに通じ、反対の東端には3段の階段があって、各廊より0.45mほど高い内陣にそれぞれ通じる。身廊の両側に三つずつの開口があって側廊と結ぶ。ここには丁寧な戸締り装置の痕を認める。身廊の床は石を敷いて下地とし、石膏漆喰を厚く二重に塗り上げるのを原則としたらしい。主内陣は身廊に向かって3m

の幅で開き、戸締り装置の痕跡はない。この空間の東寄りには破壊が激しく、立面はのこっていない。西寄りの両側にそれぞれ通路があり、ここには階段と扉を備える。北側廊の北面に開口が三つ並ぶが、身廊側と違って戸締り装置はなかったらしい。側廊は身廊に比べてはるかに開放的だったことになる。南側廊は掘り上げが済んでいない。内陣南脇室が手前に張り出していて、その分側廊が短くされた。身廊との仕切壁を穿って墓としていたのもこちら側だった。こうして見ると、三廊における開口の対称的配置、その仕切り壁の形状、内陣回りの高さ関係や脇室への通路など、アイン・シャーイアの遺構とあまりにも類似点が多いことがはっきりする。

規模の点では三つの教会とも同じではない。アイン・シャーイアの遺構が最も小さく、アル・クスールのものが最大である。躯体の壁厚も、規模に応じてそれぞれ相違する。しかしながら、平面構成から見ると、どの教会にも三分形の内陣があって、少なくともその主内陣の奥壁に矩形のニッチをそなえている。礼拝広間は仕切り壁でそれぞれを隔てる三廊式で、身廊と両側廊は対称の位置に配された狭い開口によって通じる。三廊の手前にもう一つの部屋が付く点も共通し、ハーグ島とアル・クスールではナルテクスと呼ん

で差し支えない造りとなっている。アイン・シャーイアの場合は、両端が未発掘のままであるにしても、正面に入り口がなく舗装もされていないのでナルテクスというよりは単なる廊下とみた方がよい。

このように三つの遺構を最も客観的に比較する手段がその平面構成に潜んでいることがわかる。各平面は次のような共通する矩形要素から成り立っているのである。まず第一に、最も外側の輪郭をなす矩形であるが、この場合、アイン・シャーイアの前室部分が他とちがった性格が付与されるので、そのナルテクス相当部分を含んで計測した値と除外した値の両方を検証する。第二は内陣と三廊を包含して教会の内部空間全体をなす矩形、第三は三廊部分、第四は身廊のみ、最後に主内陣の矩形に注目する。これらの矩形を法量的に比較すれば、教会建築の設計に一定の原則ないしは規格が存在したか否かを推し量ることができるはずである。その結果、二つの注目すべき事実を読み取ることができた [Okada 1992]。一つは、すべての教会について、各々の矩形要素が同様な比例をもち、とくにナルテクス部分を除外した輪郭の矩形が厳密な一致を示す。その値は8:5といういわゆる「黄金比」にきわめて近い。他の四つの矩形要素についても、縦横比はほとんど例外なく近似している。

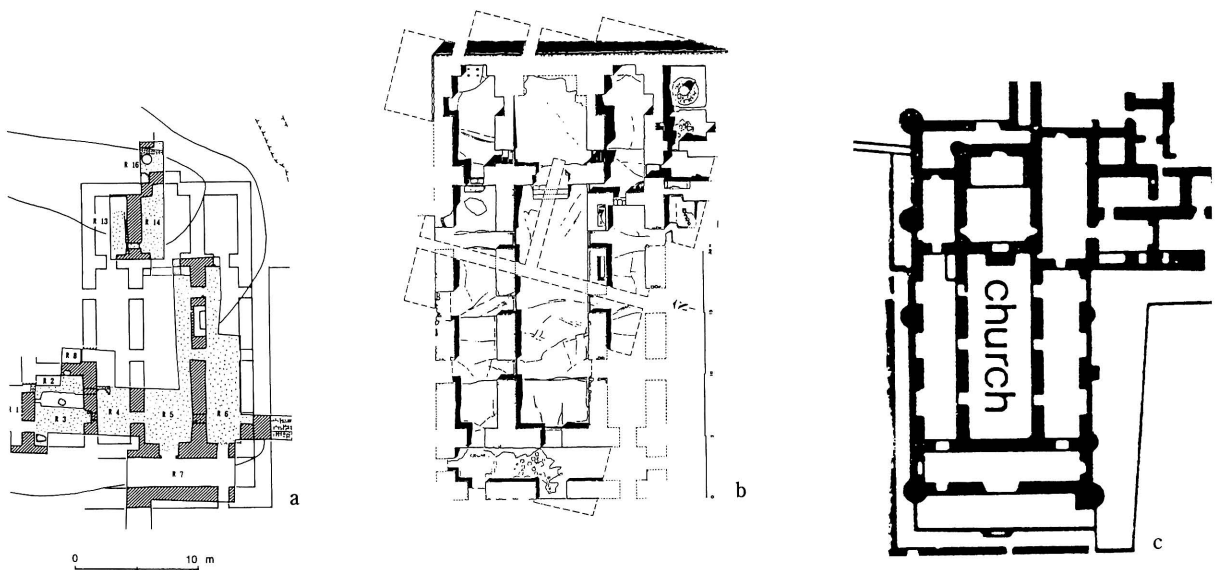


図1 教会堂遺構3例

- a. アイン・シャーイア [Okada 1991: Fig. 1]
- b. アル・クスール [Bernard et al. 1991: Fig. 19]
- c. ハーグ島 [Whitehouse et al. 1993: Fig. 9]

第二の点は、壁厚と矩形規模との関係である。アイン・シャーイアの平均的な躯体の壁厚 1.10 ないし 1.15 m と、アル・クスールの 1.60 m という壁厚との比 1:1.40 という値が、矩形規模の長さの比の中間値 1.38 にごく近い。これら二つの教会の平面計画の間には、すべての矩形要素について一定の比例関係が明らかに存在し、しかもそれが躯体の壁厚にまで反映しているとみてよいのではなかろうか。ハーグ島の場合、壁厚は報じられておらず、図面から推し量るには無理があるのでここでは不明とせざるをえないが、主内陣と身廊とを除けば、アイン・シャーイアとの比はおおむね 1.10 前後に収まっており、ここにも有意の比例関係があった可能性は大きい。

## 5. むすび

アイン・シャーイアの修道院は創建を 8 世紀後半とし、9 世紀いっぱい存続したと私たちは考えている。それに対し、ファイラカ島アル・クスールの教会は少量の土器から 7 世紀半ばを創始の時期とされ、ハーグ島修道院は、スタッコ製品の意匠上の特徴からの判断だけで 5 世紀ないし 6 世紀という年代をギルシュマンは提示している。後者の見解は早すぎるように思われ、アル・クスールの発掘者からも同様な指摘が表明されている。いずれにせよササーン朝の時代まで遡りうるかどうかという時代の遺構である。これら三つの遺跡は、イスラームが西アジアに勃興した時代にもなお、バビロニアからアラビア湾にかけての広い地域に、共通した教会様式が存在したことの証左となるのではなかろうか。それは今まで知られていたシリア、パレスティナ、さらにトゥール・アブディン地方の当時のどの教会堂においても想定することのできない規範である。

かつてフィエ博士は、二派のシリア教会それぞれに存在したはずの教会堂建築の規範を、文献と今日の教

会建築から類推したことがあった〔Fiey 1959〕。それは設備の詳細にまでわたる綿密なもので、論考にはそれぞれの平面図までも添えられたのだが、その図はあくまでも想像の域を出るものではなかった。いまやそのうちの一つ、東シリア教会（あるいはネストリウス派）が規範とした教会様式がより確実な姿で私たちの前に提示されようとしているのである。

## 参考文献

- Abbu, Adir Najim  
1987 The Excavations of the Mosul University at Imsefna, in *Researches on the Antiquities of Saddam Dam Basin Salvage and Other Researches*, Baghdad.
- Bernard, V., Callot, O. and Salles, J.-F.  
1991 L'Eglise d'al-Qousour Failaka, Etat de Koweit, *AAE* 2-2, pp. 145-81.
- Fiey, J.M.  
1959 *Mossoul Chretienne, essai sur l'archeologie et l'etat actuel des monuments Chretienne de la ville de Mossoul (Collection Recherches 12)*, Beyrouth.  
1968 *Assyrie Chretienne*, Vol. III, Beyrouth.
- Finster, B. and Schmidt, J.  
1968 Sasanidische und frühislamische Ruinen im Iraq, *Ba. M.* 8.
- Fujii, H., Ohnuma, K., Okada, Y., Matsumoto, K., Shibata, H. and Numoto, H.  
1989 Excavations at Ain Sha'ia Ruins and Dukakin Caves, *al-Rāfidān* 10, pp. 27-88.
- Ghirshman, Roman  
1960 *The Island of Kharg*, Tehran.
- Oates, David  
1962 Qasr Serij — a sixth century basilica in northern Iraq, *Iraq* 24, London, pp. 78-89.
- Okada, Yasuyoshi  
1991 Early Christian Architecture in the Iraqi South-western Desert, *al-Rāfidān* 12, pp. 71-83.  
1992 Ain Sha'ia and Early Gulf Churches: an Architectural Analogy, *al-Rāfidān* 13, pp. 87-93.
- Reuther, Oscar  
1929 The German Excavations at Ctesiphon (tr. by R.G. Austin), *Antiquity* 3, London, pp. 434-451.
- Talbot Rice, D.  
1934 The Oxford Excavations at Hira, *Ars Islamica* 1, Michigan, pp. 51-73.
- Whitehouse, D. and Williamson, A.  
1973 Sasanian Maritime Trade, *Iran* 11, pp. 29-49.